

---

---

# モンゴル国における住居フェルト生産の変遷

## —工業製品と手作業の製品—

風戸 真理

(北星学園大学短期大学部)

### I はじめに

本章では、モンゴル国の畜産物のなかでも毛をとりあげ、羊毛製品の代表であるフェルトに焦点をあてる。羊毛の流通とフェルトの生産は、20世紀以降の国家の政治経済体制の変化のもとで、どのような影響を受け、どのように変化してきたのだろうか。とくにモンゴルの近代化にともなう工業化とフェルト生産はどのような関係にあるのだろうか。

フェルトとは、原則として、獣毛を縮絨（しゅくじゅう）させて作られた不織布である。縮絨（あるいはフェルト化）とは、獣毛に熱・水分・摩擦・圧力などを加えることで、獣毛のキューティクルを開かせて繊維どうしを互いに絡み合わせ、その後、キューティクルが閉じてこれがほどけなくなる変化である。人類が最初に発明したフェルト生産技術は、獣毛に水分や摩擦などを加えて縮絨させる「ウェット・フェルティング」(wet felting) 技術であり、モンゴルでも昔からこの方法でフェルトが作られてきた<sup>1)</sup>。

モンゴル高原では紀元前からフェルトが利用されてきた[Myagmar

---

<sup>1)</sup> 20世紀のアメリカ合衆国で、化学繊維を含む多様な繊維を不織布に仕上げることのできる工業技術として、ニードルパンチ(needle punch)製法が発明された。ニードルパンチ製法の原理は、返しのついた針で繊維を繰り返し刺すことで繊維を絡みあわせるものである。モンゴル国でも首都の一部の工場ではニードルパンチ製法によってフェルトが生産されているが、地方の工場ではウェット・フェルティング技術による生産が主流であるため、本章ではウェット・フェルティング技術で作られたフェルトに焦点をあてる。

2006 : 13]。また、13～14 世紀の元朝期には、住居の覆いとしてのフェルトが、ほとんどの家族によって生産されると同時に、交易や課税のための通貨の役割をも果たしていた [Batchuluun 2009 (2000) : 36]。

モンゴル国では現在、さまざまなフェルト製品が生産されているが、牧民の生活の中でもっとも重要な位置を占めているのは、移動式住居「ゲル」(ger) (写真 1) の壁や屋根、床等となる巨大で厚いフェルトであろう。モンゴル国では現在でも、牧畜地域と都市部との両方でゲルが住居として用いられており、ゲルは実用品の座を占めている<sup>2)</sup>。その一方で、2013 年には「モンゴル・ゲルの伝統的職人技とそれに関連する慣習」がユネスコの無形文化遺産に登録された [UNESCO 2013]。このことにより、羊毛の刈り取り (写真 2) から始まるフェルトの生産過程は無形文化遺産の一部となっているのである。

本章では、ゲルの壁や屋根に用いられるフェルトをまとめて「住居フェルト」とよぶ。生産過程からみれば、すべての住居フェルトは最初に長方形に作られ (写真 3)、壁用にはほぼそのまま使用され、屋根用



写真 1 ゲル

---

<sup>2)</sup> ゲルの詳細、とくにゲルの歴史については松川 (1998) を、移動とサイズ変化については風戸 (2015) を参照されたい。



写真2 家族総出でヒツジの毛刈り



写真3 長方形に作られたフェルト(中央)と扇形に加工されたフェルト(左)

には切ったり縫い合わせたりすることで扇形に加工される。このため本章では、とくにことわりなく「住居フェルト」もしくは「フェルト」という場合、縫製加工される前の長方形のフェルトを指すものとする。なお、モンゴル語でフェルトは「エスギー」(*esgii*)とよばれる。

住居フェルトを工業用品として生産する場合には、そのサイズや原料が「モンゴル国家規格」[MNS : Mongolian National Standards]によって定められている。たとえば、2008年改定の「ゲルのフェルト、技術的要請」[MNS 0296 : 2008]では、住居フェルトのサイズは約1.8 m×5.2 m×12 mmとされている。ただし、牧民が自家消費用に住居フェルトを作る場合には国家規格は適用されないため、モンゴル国でゲルの壁として実際に使われている住居フェルトのサイズにはバリエーションがみられる。しかしながら、日本の畳に換算するとおおむね6畳分にも相当する巨大な一枚物のフェルトが長らく手作業と畜力によって生産されてきたことは注目に値する。

## II モンゴルのフェルトに関する先行研究と本章の課題

モンゴルの住居フェルトの生産はどのようにおこなわれてきたのだろうか。本節では、住居フェルト生産の技術、これに関連するフォークロア、そして社会との関係について先行研究に依拠して検討する。

モンゴル国の研究者たちは、古代からのフェルトの利用やフェルト生産の技術、そしてフェルト生産にまつわる慣習やフォークロアについて記述してきた[例えば、Sampildendev 1985 ; Batchuluun 2000 (2009) ; Myagmar 2006]。これらの文献にはフェルト生産に関連する祝詞やことわざが多数収録されており、フェルト生産の各工程が豊かなフォークロアの世界と繋がっていることが示唆されている。同時に、フェルト生産は社会的な営みでもあった。H. サンプルデンデウによれば、フェルト生産は単一世帯の労働力だけでは対応できない重労働であり、そのため、作業日程を事前に近隣の人びとに知らせることで協業を組織する工夫がなされてきた[Sampildendev 1985 : 65]。このように、フェルト生産は

モンゴルの文化、社会に埋めこまれていたといえる。

モンゴル国以外の研究者は、文化比較の視点をもって、モンゴル高原各地でみられるフェルト生産の過程を記述してきた。まず、ハンガリーの人類学者である A. ロナ=タス（1963）は、1957年と1958年に社会主義期のモンゴル国スフバートル県をたずね、そこでフェルト生産を観察した。当時は社会主義期で、フェルトは主に半機械化された工場生産されていたはずであるが、彼が見たのは、手作業で羊毛を処理し、畜力によって羊毛を縮絨させる方法であった。次に、内モンゴル人の人類学者である楊海英（1996；1999）は1991～1993年に中国・新疆ウイグル自治区で、また、1996年には民主化したモンゴル国の南部ゴビ草原におけるフェルト生産を調査した。ロナ=タスと楊の研究により、モンゴル系の人びとはフェルトを作る時に「母フェルト」とよばれる既存のフェルトを用いることもわかった<sup>3)</sup>。

これらに続いて著者は、2001年のモンゴル国ドンドゴビ県と2004年のザブハン県においておこなった調査にもとづき、フェルト生産には、一時的に多くの労働力と畜力を必要とするため、世帯=核家族を越えた労働交換の組織が規範化されていること、生産に関わる知識・技術は人びとの記憶や身体に埋め込まれていて、これが共同作業のなかで他者に継承されること、などを明らかにした（写真4）[風戸2011-a；2011-b；2012；Kazato2011]。

以上のように、住居フェルトの生産技術とそれに関わる文化的な慣習および社会との関係については、モンゴル国とその周辺地域での観察資料が蓄積され、その特徴が明らかにされてきた。ただし、社会主義期以降には住居フェルトは主に半機械化された工場で作られてきたのにもかかわらず、これまでの住居フェルト生産の研究は伝統的な手作業にのみ注目してきたのであり、モンゴル国のフェルト文化における工場生産の

<sup>3)</sup> 母フェルトは、既存のフェルトと同じサイズと厚さのフェルトを作るために不可欠な「型」である。母フェルトの上にふわふわの羊毛を並べ、これを母フェルトごと巻いて水分や摩擦などを加えて縮絨させることで母フェルトと同じサイズの娘フェルトを得ることができる。詳しくは別稿を参照されたい [風戸2011-a；2011-b；2012；Kazato2011]。



写真4 共同作業でおこなわれるフェルト生産

位置づけは把握されてこなかった。そこで本章は、住居フェルト生産の機械化をはじめとして、モンゴルの羊毛流通とフェルト生産が国家の政治経済変化によってどのような影響を受けてきたのか、とくに、社会主義化と市場経済化によってフェルト生産はどのように変化したのかを分析する。そのうえで、伝統的な手作業によるフェルト生産と半機械化された工場でのフェルト生産を、1920年代から2010年代までの約100年間のマクロな政治経済の変化のもとに位置づけ、両者の関係を示す。

### Ⅲ 研究対象と研究方法

本章が対象とする時期は主に、1920年代～1980年代の社会主義期と、1990年代以降の市場経済化期（移行期）である。分析に用いる資料はモンゴル国の国家統計である。

モンゴル国のフェルト製品には、(1)住居フェルト（写真5）の他に、(2)昔ながらの家畜管理用品や生活雑貨（その代表はフェルト長靴、写真6）、(3)外国人観光客向けのみやげもの、がある。これらのうち、(1)と(2)はモンゴルのとくに牧民の生活必需品であり、いわば「伝統的な



写真5 ゲルを新築するために作ったフェルトの縁を補強する



写真6 フェルト長靴

フェルト製品」である。これに対して、(3) は外国人観光客の増加に合わせて増えてきた、比較的「新しいフェルト製品」であるといえるだろう。以下では、伝統的なフェルト製品のなかでも、とくに研究蓄積と参照可能なデータの多い住居フェルトに着眼して分析を進める。

#### IV フェルト利用の歴史

本節ではモンゴル高原周辺におけるフェルト利用の歴史を紹介したい。まず、先史時代に関しては、ノイン・ウラ遺跡（モンゴル国、紀元前後）からフェルトのラグや、男性用のフェルト製靴下<sup>4)</sup>が出土している [Myagmar 2006 : 13]。つまり、紀元前後からフェルトがインテリアや服飾に用いられていたのである。また、バジリク遺跡（アルタイ共和国、紀元5世紀頃）の柳室の床と壁面はフェルトで覆われおり [加藤 2002 : 65]、古くから居住空間とフェルトが関連していたことがうかがえる。

モンゴル帝国期には、「フェルトは各家族の必要を満たすためだけでなく、交易や課税のための通貨の一形態としての役割を果たし」、「オゴダイ、グユク、モンケ・ハーンの時代<sup>5)</sup>には、すべてでないにしろほとんどの家族がフェルト生産に従事していた」 [Batchuluun 2009 (2000) : 36]。当時、ほとんどの人がフェルトを生産して自身の住居に用いており、それと同時に、フェルトは交易や徴税のさいの貨幣のような役割を担うほど、帝国経済においては重要な物資であった。

清朝期においても、フェルト生産と国家との密接な関係がうかがえる。たとえば、モンゴル国立中央アルヒーフの目録検索で「*esgii* (フェルト)」+「*alba* (貢租・賦役)」で検索すると約70件がヒットした (Undesnii Tov Arhivyn Barimtyн Hailt, 2015年3月6日現在)。その文書のタイトルは、たとえば、「駅所の公務所にゲルを準備させてそのフェルト用の羊毛を繁殖ヒツジ群から供出させることについて」 [M-3/1/733, 1877, pp.2]、「(前略) 役所の財産、官吏の駅所のためのゲルのフェルトを出さ

<sup>4)</sup> ブーツの上縁から模様が見える装飾性の高いもの。

<sup>5)</sup> 1229～1259年に当たる。

せる文書」[A-33/1/606, 1914, p.1] などであり、フェルトの材料となる羊毛の提供やフェルトの生産が貢租・賦役となっていたことがわかる。

このように、遅くとも 13 世紀から 20 世紀初頭まで、多くの牧民が自身の住居を覆うためにフェルトを自作していたと同時に、フェルトが「納税における重要な役割」[Batchuluun 2009 (2000) : 36] を果たしたり、フェルトの生産が貢租・賦役の役割を果たすなど、フェルトの生産と流通は国家の統制の下にあった。それと同時に、フェルト生産は饗宴、遊び、儀礼的な祝詞をとまなう重要な文化行事でもあった [前掲書 : 20]。

## V 社会主義期における住居フェルトの生産 | 1920 年代～1980 年代

モンゴルは 1921 年に中華民国から独立し、1924 年に社会主義国としての近代化の歩みを始めた。その初期にあたる 1930 年代前半の初期工業発展は、軽工業・繊維部門に重点をおいていた [モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 (1969) : 328-329 ; 351-354]。具体的な政策としては、第一に、党・政府が一般人による個人手工業を奨励するとともに減税し [前掲書 : 337]、家内制手工業を増強させた [前掲書 : 329]。この家内制手工業に住居フェルトの生産も含まれていたと考えられる。第二に、家畜頭数を増加させるとともに、牧民経営を生業でなく商品経営体として発展させる努力と、畜産物の国外輸出を開始した [前掲書 : 345-347]。このため流通も盛んになり、一般商人<sup>6)</sup> が畜産原料の買い上げなどの面で活躍した [前掲書 : 345-347]。

1930 年代も後半になると状況が逆転した。バトチョローンによれば、それは牧民による伝統的で小規模・手作業のフェルト生産が、工場ベースの半機械化システムにおきかえられていったからであり、その背景にはソ連に指導されたモンゴルの経済政策があった [Batchuluun 2009 (2000) : 20]。

---

<sup>6)</sup> 一般商人は「おもに国家から商品を買って商売を行い、牧民からは畜産原料を買って国家に供出していた」[モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 (1969) : 347]。



写真7 羊毛と肉を生産するヒツジの群れ

1950年代後半からは、「すべての羊毛が各地の農牧業協同組合『ネグデル』によって回収され、ウランバートルに送られてフェルトや生地加工された。そして牧民は、何世紀も続いたフェルトの生産や刺し子をすることを続けることができなくなった」[Batchuluun 2009 (2000) : 20]。この時期にモンゴルは、ネグデル支配による畜産物流通の時代に入ったのである。ネグデルは羊毛(写真7)にとどまらず牧民が生産したすべての畜産物に生産ノルマを課して、経済計画に従ってこれらを買上げる体制を整備していった。1980年代中頃には、G. ミヤグマルによれば、住居フェルトとフェルト長靴を製造する2つ目の工場が操業開始し、そのことにより伝統的なフェルト生産は中断期に入った[Myagmar 2006 : 53]。

ここで、1940年～1990年における、全羊毛に占めるフェルト生産の割合をみてみよう。ネグデルが生産した全羊毛のうちフェルトに加工された羊毛の割合を、フェルト1mあたり4.0kgの羊毛を必要とするものとして計算したところ<sup>7)</sup>、1940年～1990年のあいだにフェルトに加工さ

<sup>7)</sup> 算出根拠は、モンゴル国家規格「MNS0296 : 2008(ゲルのフェルト、技術的要請)」に準じた。

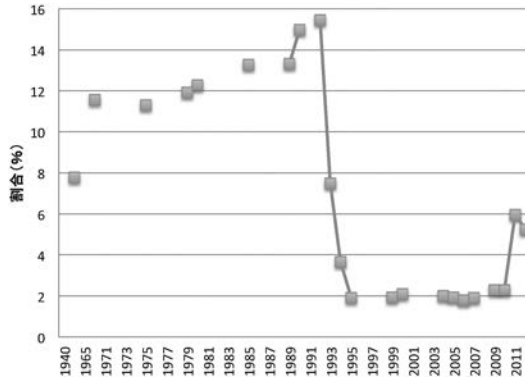


図1 フェルトにされた羊毛が生産された全羊毛に占める割合  
 出典：Central Statistical Board under the Council of Ministers of the MPR (1981),  
 National Statistics Office of Mongolia (1981, 1998, 2001, 2010, 2013) ; State Sta-  
 tistical Office of Mongolia (1996).

れた羊毛はおおむね増加傾向にあり、その割合は全羊毛の約7~16%に達していた(図1)。このことは、モンゴルが畜産物を生業経済の一環として自家消費したり、あるいは原料のまま輸出する国から、これを自国内で加工して製品化する工業国に変わってきたことを意味している<sup>8)</sup>。

以上をまとめると、社会主義期におけるフェルト生産は、初期に限っては牧民の手作業と畜力に頼る方法での増産が図られたが、1930年代後半以降には、半機械化された工場で工業製品として大量生産されるようになっていった。原料については、1950年代後半に牧畜業の集団化が完成してからは、羊毛のすべてがネグデルに回収されてウランバートルの工場での加工に供されるようになったことから、牧民は昔ながらの方法でのフェルト生産を続けることができなくなった。この時期、牧民は羊毛を生産してネグデルに納め、そしてネグデルから得た給料で工場製のフェルトを購入して、使用していたのである。このように、社会主義期を通して住居フェルトは、生業から工業の領域へ、手作業で生産さ

<sup>8)</sup> 羊毛を原料とした工業製品としては住居フェルトの他に、洗った羊毛(スカーフ)・絨毯・フェルト長靴・生地(ニットと織り物)・衣類(コートとスーツ)などがあった [National Statistical Office of Mongolia 1996: 182-185]。

れるモノから機械で生産されるモノへ、自給自足のモノから都市の工場  
で生産されて国家規模で流通する商品へ、と変わってきた。

## VI 移行期における住居フェルトの生産 | 1990 年代～

### 1 工業部門の住居フェルト生産の減退

1990 年、モンゴルは社会主義を放棄し、民主主義・市場経済への転換を始めた。これにともない、それまでに羊毛生産の中心組織であったネグデルが解体され、羊毛の流通を担っていた畜産物調達制度が機能しなくなった。このため、国营のフェルト工場の稼働が止まってしまった。

その結果、国全体のフェルト製品（住居フェルトとフェルト長靴）の生産量は 1990 年をピークに、以後、激減した（図 2）。具体的にいうと、住居フェルトは 1990 年には 74 万 5100 メートル生産されていたが、体制転換を挟んで 7 年後には 7 万 5000 メートルと、その生産量は 10 分の 1 に落ち込んだ<sup>9)</sup> [National Statistical Office of Mongolia 1998 : 184]。

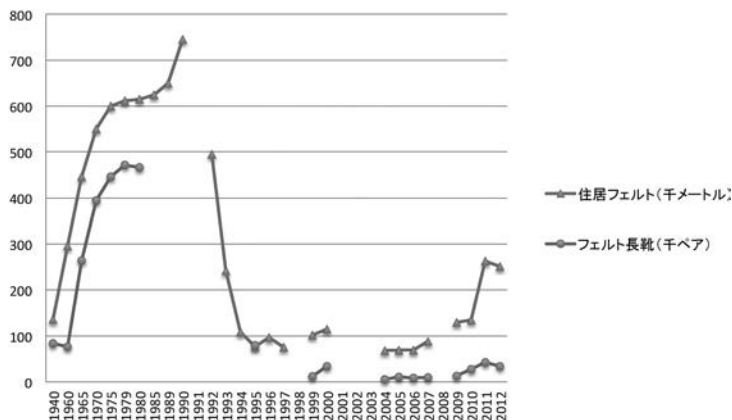


図 2 フェルト生産量の推移

出典 : Central Statistical Board under the Council of Ministers of the MPR (1981),  
National Statistical Office of Mongolia (1998, 2001, 2010, 2013)

<sup>9)</sup> フェルト長靴の生産減少はより顕著であり、1980 年の 46 万 5800 ペアから 2004 年の 4900 ペアへと約 100 分の 1 に減っている [National Statistical Office of Mongolia 1998 ; 2009]。



写真8 何重にもつぎあてされた住居フェルト

同時期の、全羊毛中フェルトにされた羊毛の割合をふりかえてみると（図1）、1991年から1995年にかけて約16%から約2%まで落ちこみ、その後、2013年に至るまで全羊毛の約2~6%を占めるにとどまっている。これは、ネグデル期の半分以下の割合である。

ここで注意しておきたいのは、これらのデータは、モンゴルにおいて住居フェルトの需要がなくなったことを意味するものではないということである。図1のもととなったデータは、工場で生産されたフェルトの量のみを表したものである。これ以外に、ある者は自宅でフェルトを自作し、ある者は中国からフェルトを輸入して転売することを始めた。なぜなら、ゲル居住者にとって、ゲルの部品としての住居フェルトは不可欠だからである。そして、住居フェルトは日常的な使用・風雪・日光などによって絶えず劣化するので、メンテナンスや交換が必要な消耗品なのである（写真8）[風戸2015]。

## 2 牧民による住居フェルト生産の再興

このような事情を背景に、再び牧民自身の「手」によって住居フェルトが生産されるようになった。とはいえ、牧民の手作業によるフェルト

生産には、前節で述べたようにブランクがある。

このブランクについて検討したい。図3に、1960年から2013年までの「工業部門のフェルト生産」と「牧民のフェルト生産」の変遷を示した。社会主義期には「工業部門のフェルト生産」が急増したことが読みとれるが、「牧民のフェルト生産」に関するデータはない。その理由は、1960年～1980年代には牧民によるフェルト生産が奨励されていなかったこと、1980年代中頃以降には牧民によるフェルト生産がほぼ断絶していたからであると考えられる<sup>10)</sup>。ただし、第2節で述べたとおり、人類学者のロナ=タスは1957年と1958年にスフバートル県で牧民の手作業によるフェルト生産を観察している。この時期はネグデル制度の完成期にあたるため、牧民による慣習的なフェルト生産の残存を外国人研究者が見たとは考えにくい、学術ないしは観光目的で特別に手作業によるフェルト生産がおこなわれる機会があったことが推察される。

次に、1991年以降の「牧民のフェルト生産」について詳しくみていこう。モンゴル国家統計局によれば、1991年には、約11万5000世帯

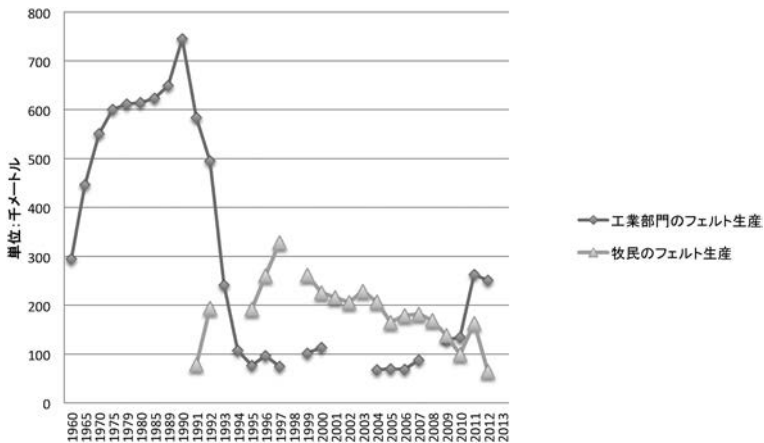


図3 工業部門と牧民によるフェルトの生産

出典: National Statistical Office of Mongolia (2013, 2008, 2005, 2001, 1999)

<sup>10)</sup> 社会主義期には、牧民がフェルトを製作することが家内制手工業として抑制されていたと話す牧民もいた。

あった牧畜世帯の約 10.5% (約 1 万 2100 世帯) が住居フェルトを作った [USG 1993, 1996]。その後、1990 年代前半には都市・定住地で仕事を失った人びとが草原に移動したこともあり、牧畜世帯が約 1.5 倍に増えたが (約 17 万世帯)、その約 19.5% (約 3.3 万世帯) が住居フェルトを作っている [前掲書 1993, 1996]。さらにいえば、草原では、複数の世帯が集まって居住集団が作られることや、フェルト生産のさいには近隣の人びとが作業を手伝うべきだという規範があることを考慮すると、多くの牧民がフェルト生産に関与したものと考えられる。

牧民によって作られたフェルトの量も、1991 年の 7 万 890 メートルから、1995 年には約 2.7 倍の 19 万 2300 メートルに伸びた。ここで注目すべき事実として、1995 年に、牧民が作った住居フェルトの量が、工場生産の住居フェルトの量を上回ったことがあげられる (図 3)。工業部門の住居フェルト生産量ももっとも大きく減退し、これを受けて、牧民によるフェルト生産が急増した時期である。

1990 年代以降の牧民によるフェルト生産は文字どおり試行錯誤によるものであった。筆者は 2000 年代前半のドンドゴビ県とザブハン県において牧民のフェルト生産を観察したが、人びとは過去の記憶をたどり、断片的な知識を提示しあい、それらを寄せ集めることでフェルトを作っていた。フェルト生産に欠かせないと言われる祝詞についても、「なんだっけ?」「『トムバイ』では?」などと言ひ合い、弱々しい声で祝詞を唱えていた (写真 9)。

### 3 フェルト工場の再稼働

ところが、2010 年になると、再び、工場製のフェルト生産量が牧民によるフェルト生産量を上回るという転換が起きた (図 3)。これは、牧民によるフェルト生産量が 1990 年代の後半以降に、漸減する一方で、工業部門のフェルト生産が 2000 年代後半に回復したことによるものである。

フェルト工場は、2000 年代には、ウランバートルの他に郡の中心地などにも多くみられるようになった。ドンドゴビ県デルゲルツォクト郡



写真9 羊毛を牛革で包んだ時に「トムバイ、トムバイ」と祝詞を唱える

のフェルト工場を訪ねると、建物と機械が古びていたので、その由来を問うと、その設備はもともとネグデルのものであったという。ネグデルのフェルト工場の建物や機械は、1990年代初頭の民営化のさいに、組合員である従業員らに分割して分配された。後にそれらをまとめて買った者が設備をメンテナンスし、工場を再稼働させたということであった。

市場経済化期のフェルト工場におけるフェルト生産の技術は、基本的には、社会主義期の工場で採用されていたのと同じ「半機械化されたウェット・フェルティング技術」である。つまり、一部の工程は手作業でおこなうが、一部の工程で動力機械を使用するのである。たとえば、羊毛を型どおりに並べる工程は手作業でおこなわれるが、羊毛を縮絨させるために摩擦や振動を加えるのには動力機械が使用される(写真10)。

なお、牧民によるフェルト生産は、「すべての作業を手作業と畜力でおこなうウェット・フェルティング技術」によっている。工場との違いがきわだつ工程としては、羊毛に摩擦や振動をかけるさいに、工場ではこれを動力機械でおこなうが、牧民はラクダ(写真11)やウマ(写真12)の畜力で引かせるのである。



写真10 羊毛工場の作業台と輪転機（右奥）



写真11 ラクダで羊毛を転がして縮絨させる

社会主義期の工場と市場経済化期の工場の設備や技術はおおむね連続しているものと考えられる。また、牧民のフェルト生産と工業部門のフェルト生産も、違いは動力が人や家畜であるのか機械であるのかだけであり、羊毛を扱う順序や縮絨のプロセスなどは変わらない。



写真 12 ウマで羊毛を転がして縮重させる

## Ⅶ おわりに

このように、住居フェルトの生産は一貫して続いてきたが、その生産のありかたは国家の政治済体制の変化のもとで影響を受け、変わってきた。では、なにが、どう、変わり、なにが持続してきたのかをここでまとめておきたい。

まず、変化したのは、住居フェルトの生産方法、つまり手作業か、機械化か、である。つまり、ネグデル期以前は牧民の手作業による生産が主であったが、ネグデル期になると半機械化された工場での工業的な生産に移行した。そして、民主化直後は工場生産の減退にともない、一時的ではあるが、手作業による生産が需要に応えた。そして近年、再び工場製のフェルト生産が活発になり、生産の中心を担うようになったというわけである。

一方で、住居フェルトの生産においては時代を通して持続してきた諸要素がみいだせる。第一に、原料についてである。工場製の住居フェルトには羊毛以外の繊維が混ぜられることもあるが、住居フェルトの主要原材料は天然の羊毛であり続けてきた。第二に、20世紀以降の住居フェ

ルト生産は工場生産がメインであるが、牧民のあいだでは手作りの技術が、細い回路を通じてではあっても、継承されてきたようである。それが証拠に、国家の混乱期には牧民が住居フェルトを試行錯誤しながらも自作し、そのことが遊動的な牧畜生活をハード面で支える結果となった。第三に、住居フェルトのおおまかな仕様やデザインも長らく変わりがなかった。

以上からいえるのは、工業部門のフェルト生産と牧民のフェルト生産は相補的な関係にあるということである。既存の研究は、牧民のフェルト生産を伝統的で文化本質的なものとして時代状況や社会的な文脈と無関係に論じてきた側面があるが、本論は工場生産と牧民によるフェルト生産の両方に焦点を当てることで、両者の相補的な関係を明らかにした。

最後に、このような住居フェルト生産の変化と持続、そして工業製品と手作業の製品の補完性からうかがえる、現代モンゴル社会の特徴を検討したい。

一つめに、理念の側面、つまりフェルトをめぐるモンゴル国内の文化的イデオロギー、またフェルト製品をめぐるグローバルな視線について考慮する必要があるだろう。バトチョローンによれば、社会主義の公式イデオロギーは、民衆の生活のなかに埋めこまれたフェルト作りを「文化」としては過小評価してきた。このため、2000年以降、社会主義的な「文化観」に対抗して伝統的な「文化の復興」を産む意図でフェルトへの強い関心が集まった [Batchuluun 2009 (2000) : 21]。つまり、モンゴルにおけるフェルト工芸全般への新たな関心はモンゴルのナショナリズムとリンクしていたのである。このような文脈のなかで、2013年、「モンゴル・ゲルの伝統的職人技とそれに関連する慣習」がユネスコの無形文化遺産に登録された<sup>11)</sup>。このことは、フェルト生産をはじめとするゲルを生産する技術とそれともなう慣習が、モンゴル文化の重要な部分を担うという認識が国際社会において承認されたということの意味

<sup>11)</sup> 2014年に「キルギスとカザフのユルタ製造の伝統的な知識と技術」もユネスコの無形文化遺産に登録された。

する。ユネスコのホームページにはフェルト生産に関する紹介文や映像作品が掲載され [UNESCO 2013]、モンゴル国内でもフェルト生産に関するフォークロアや歴史、フェルト生産の技術に関する書籍が出版されている [Batchuluun 2000 (2009) ; Myagmar 2006]。これらは、フェルト生産がグローバルで標準化された文化項目のひとつと位置づけられると同時に、フェルト生産に関わる慣習や技術が記録・文字化され、ある意味では固定化される動きであるとみなすこともできるだろう。

二つめに、実践の側面、つまりモンゴル国においては現在も多くの人がびとがゲルに住み続けていて、住居フェルトはモンゴルのローカルな住文化に支えられた実用品であるという点に着眼し、工場製と手製のフェルトの価値のもつれあいと併存のあり方を指摘したい。というのは、住居フェルトは、国家の経済体制の影響のもとで、その原材料となる羊毛の流通のあり方、フェルトの生産量、作り手、生産方法が変化してきたが、変化しながらも一貫して生産され続けてきたという事実がある。そのなかで、モンゴルのゲル居住者たちは、手製と工場製のフェルトを状況に合わせて使い分けてきた。たとえば、工場製のフェルト（写真13）は軽いので移動の多い夏に使い、手製のフェルト（写真14）は厚くて



写真13 薄くて軽い工場製のフェルト



写真 14 厚くて暖かい手製のフェルト

暖かいので移動の少ない冬になったらその上に重ねるという語りが多く聞かれた。他方で、「未熟に作った手製のフェルトよりも工場製の方が高品質で耐用年数が長い」[風戸 2015 : 123] と話す工業製品愛用者もいた。人びとは季節、ライフスタイル、好みなどに合わせて手製と工場製の住居フェルトをその時々によって価値づけ、使い分け、併用しているのである。つまり、モンゴルの人びとは国家の政治経済状況に合わせてその都度可能な技術を用いて住居フェルトを作り続けてきたし、また、新しい技術や製品を柔軟に選択して自らの生活の便宜を高めてきたのだといえる。

#### 付記

本研究は、JSPS 科研費 JP23720425 「生産現場における人とモノの関係性みる社会主義経験の多様性と普遍性」(研究代表：風戸真理)、2011 年～2015 年(若手 B)の助成を受けたものです。

## 参考文献

- Batchuluun, L.  
2009(2000) *Felt Art of the Mongols*. Bembi San.  
Central Statistical Board under the Council of Ministers of the MPR  
1981 *1921-1981 National Economy of the MPR*.
- 加藤定子  
2002 『古代中央アジアにおける服飾史の研究——パジリク文化とノイン・ウラ古墳の古代服飾』東京堂出版。
- Kazato, Mari  
2011 Unique Technique of Felt Making in Mongolia using Ekhe Esgii (mother felt), *The 10th International Congress of Mongolists, International Association for Mongol studies*, August 9-13 (12) 2011, Ulaanbaatar, Mongolia.
- 風戸真理  
2011-a 「母フェルトがはぐくむフェルト1: モンゴル国ドンドゴビ県の住居フェルト作り」『染織情報α』9月号: 2-3。  
2011-b 「母フェルトがはぐくむフェルト2: モンゴル国ザブハン県の住居フェルト作り」『染織情報α』染織と生活社、11月号: 4-5。  
2012 「母フェルトがはぐくむフェルト3: 母フェルトとは何か」『染織情報α』1月号: 4-5。  
2015 「時空を超えて暮らしを包む住居: モンゴル・ゲルのフレキシビリティ」佐藤知久・比嘉夏子・梶丸岳(編)『世界の手触り—フィールド哲学入門』pp.109-127、ナカニシヤ出版。
- 松川節  
1998 「移動と定住のはざままで」佐藤浩司(編)『住まいをつむぐ』pp.196-214、学芸出版社。
- モンゴル科学アカデミー歴史研究所(編)  
1988(1969) 『モンゴル史1・2』二木博史・今泉博・岡田和行訳、田中克彦監修、恒文社。
- Mongolian National Standards  
2008 *MNS 0296 : 2008 Mongol Geriin esgii*.
- National Statistical Office of Mongolia  
1994 *Mongolian Statistical Yearbook 1993*.  
1998 *Mongolian Statistical Yearbook 1997*.  
1999 *Mongolian Statistical Yearbook 2008*.  
2001 *Mongolian Statistical Yearbook 2000*.  
2002 *Mongolian Statistical Yearbook 2001*.  
2005 *Mongolian Statistical Yearbook 2004*.  
2008 *Mongolian Statistical Yearbook 2007*.  
2010 *Mongolian Statistical Yearbook 2009*.  
2013 *Mongolian Statistical Yearbook 2012*.
- Myagmar, G.  
2006 *Mongolyn Esgii, Esgii Edleliin Uusel, Hogjil*. Bitpress HHK.

Rona Tas, A.

1963 Felt-Making in Mongolia. *Acta Orientalia* XVI : 199-215, Academiae Scientiarum Hungaricae, Budapest.

Sampildende, H.

1985 *Malchin Ardyn Zan Uiliin Ulamjal*. Ulaanbaatar.

State Statistical Office of Mongolia

1996 *Agriculture in Mongolia 1971-1995, A Statistical Profile*. Ulaanbaatar.

Undesnii Tov Arhivyn Barimtyн Hailт

2015 M-3/1/733, A-33/1/606 (<http://202.179.8.163/uta>) .

USG (Undesnii Statistikiin Gazar)

1993 *1992 Ony Mal Toollogo*.

1996 *1995 Ony Mal Toollogo*.

UNESCO

2013 *Traditional craftsmanship of the Mongol Ger and its associated customs*. (<http://www.unesco.org/culture/ich/index.php?lg=en&pg=00011&RL=00872>).

楊海英

1996 「モンゴルにおけるフェルト造り—方法論と儀礼性を中心に」『繊維製品消費科学』37(5) : 14-23。

1999 「モンゴルのフェルト作り—『母』から『娘』へ—」鈴木清史・山本誠(編)『装いの人類学』人文書院。